

種子島のアカウミガメ保全



Supported by 株式会社INPEX

調査結果と考察

2025年の本プログラムでは、これまでにないほど好天が続き8晩×4チームが夜の浜で調査を行いました。その結果、37個体のアカウミガメによる延べ39回の上陸に遭遇し、このうち32例で産卵を確認しました。なお、個体識別のできなかった遭遇例1例は除外しています。

識別個体の内訳は新規が32個体で、過年度に識別された回帰個体が5個体で、本プログラム開始以来11年間の識別個体数は262個体、回帰個体を含めた延べ調査個体数は304個体となりました。また、タグによる種子島と別の産卵地との移動は今年度2個体を確認され、通算で8個体、いずれも種子島の隣にあり国内最大の産卵地である屋久島との間の移動でした。

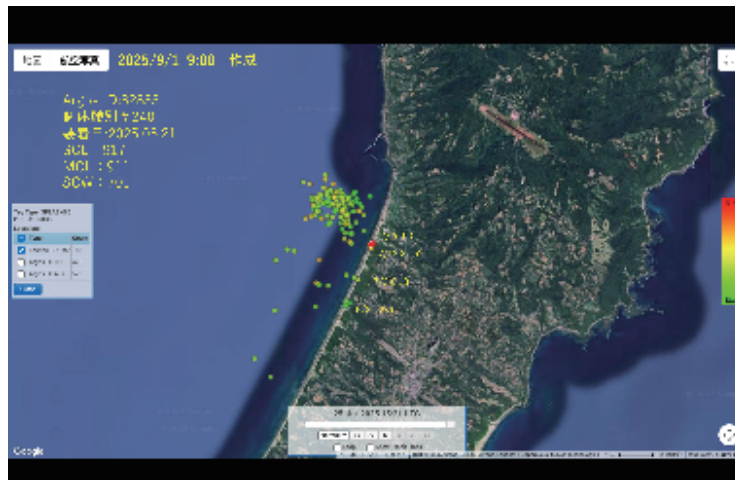
回帰5個体についてみると、標準直甲長の平均値は890.0mmで、それぞれ2019～2024年に初めて識別された時の平均甲長が873.6mmと、2025年新規32個体の平均859.2mmより大型でした。全体的に回帰率が低いものの、大型の個体は比較的回帰しやすいことが見て取れます。

産卵期間中の行動と、産卵後の回遊で危険な海域を探るため、GPS衛星発信機を2個体に装着しました。産卵期間中は、2個体とも上陸・産卵地点付近ではなく、長浜海岸北端の地先に長く滞在しており、その傾向は、1個体目の方がより強くなりました。これまで、長浜海岸における上陸産卵頻度が、常に北部で高かったこととあわせ考えると、北部の地先には、何らかの滞在に適した環境が備わっていることが示唆されます。

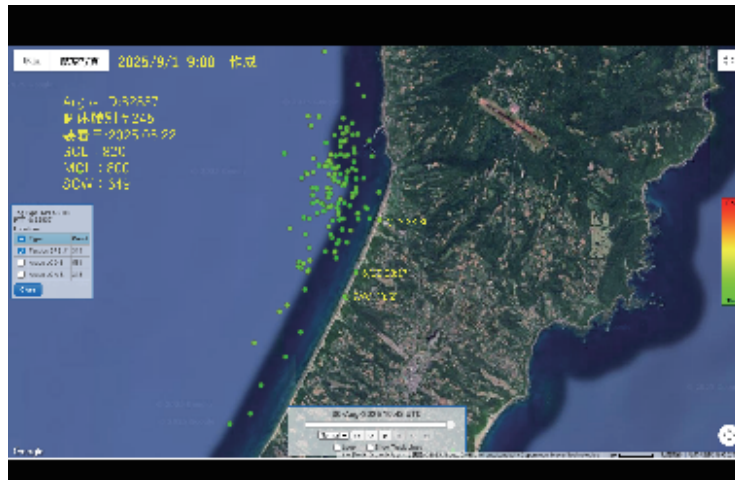
産卵後の移動に関しては、1個体目は南西諸島の東側の太平洋を南下し、台湾とルソン島の間から南シナ海へと入り、10月上旬以降は、パラワン島北西沿岸で定住を始めました。国内で産卵したアカウミガメが東シナ海へ回遊することを衛星追跡で確認したのは、おそらく初めての例になるかと思われます。

2個体目は東シナ海から対馬海峡を経て日本海へ入り、島根県沖の大陸棚、西大和海盆南部、朝鮮半島中東部沖の大陸棚を回遊した後、水温の低下に合わせて南下し、12月後半以降は九州西方の東シナ海での回遊に入りました。どちらもこれまでに主要な摂餌域として報告されてきた海域ではありません。断定は禁物ですが、生き残りやすい海域を摂餌域とする個体が増えている傍証となるのかもしれません。

1個体目：産卵期間中から9/1まで



2個体目：産卵期間中から9/1まで



調査の概要

IUCNのレッドリストで絶滅危惧II類に分類されるアカウミガメの生態を解明するひとつの方法として、産卵のために上陸するメスの生残率と産卵地の変更を明らかにする調査を行います。

種子島は屋久島に次いでアカウミガメの上陸数が多く観察されている場所です。本研究では、種子島において、産卵地を夜間踏査し、産卵個体を対象に通常タイプの標識と体内埋め込み型の標識を用いた個体識別調査を実施することで、通常タイプの標識の脱落率、他の産卵地で標識を装着された個体の移入率、および種子島で産卵したメスの回帰率について明らかにしていきます。

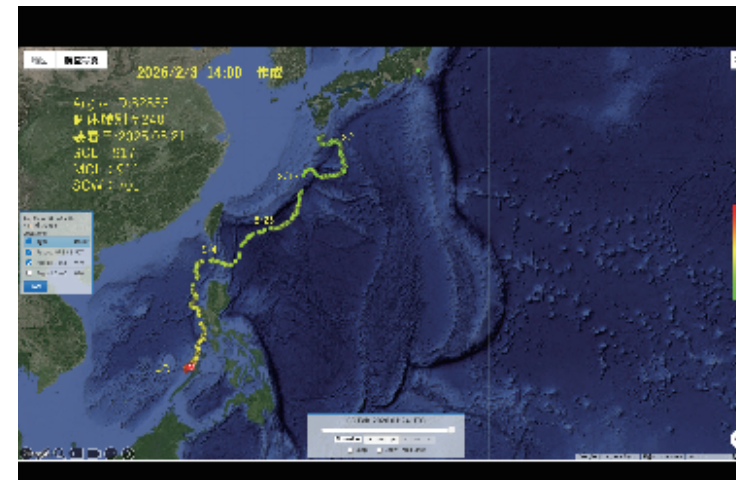
【調査地】 鹿児島県種子島の長浜海岸

2025年6月 4チーム 48名

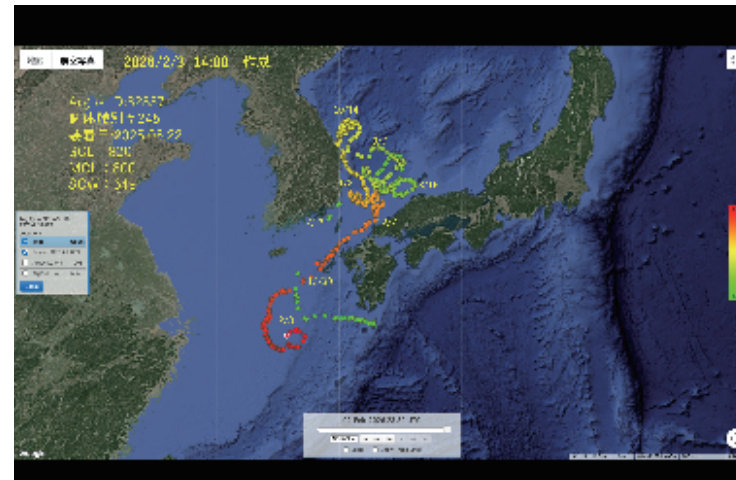
今後の見通し

大型の個体は比較的回帰しやすいことが確認されたことから、今後は、衛星追跡個体の例数を増やすことに加えて、過去の衛星追跡事例に関しても、体サイズと関連させながら、その後、産卵回帰したものと回帰しなかったものとで回遊パターンの違いを対比し整理していくことにより、危険な海域が浮き彫りになってくると考えています。

1個体目：産卵後の移動 2/3まで



2個体目：産卵後の移動 2/3まで



研究者

松沢 慶将 特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会 会長

石原 孝 特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会 理事

水野 康次郎 奄美.asia 代表、特定非営利活動法人Turtle Crew 理事

久米 満晴 特定非営利活動法人Turtle Crew 副理事長

水谷 志津江 特定非営利活動法人Turtle Crew 理事長

増山 涼子 特定非営利活動法人Turtle Crew 理事



参加者の声

大変貴重な経験をさせて頂きました。アカウミガメの個を救うのではなく種を救うという考え方に大きな意義を感じました。

アカウミガメの保全には何年もかけて集約する情報やデータが必要であり、生物多様性や持続可能な環境を維持することの難しさを改めて実感しました。アカウミガメの上陸や産卵に立ち会えたこと、保全のための情報・データ集約に貢献出来たことは印象に残っています。初めて種子島へ行き、ウミガメだけでなく、普段の生活では目にすることがない植物や景色をみて日本の広さを感じ、失いたくないと思いました。

夜の浜辺をひたすら歩くので体力的に大変であったが、ウミガメの産卵に立ち会えたことは、とても印象的であった。また、多様な背景を持つ人々と活動を通じて交流できたことも良かった。